

令和 3 年 5 月 13 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02809

研究課題名（和文）中国人日本語学習者におけるポートフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究

研究課題名（英文）A Study of construction of portfolio-style study database and Japanese grammar acquisition of Japanese language learners of native Chinese speaker

研究代表者

杉村 泰（SUGIMURA, Yasushi）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：60324373

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果の概要（和文）：本研究は中国語を母語とする日本語学習者が大学に入学してから卒業するまでの日本語学習過程を記録して、会話・作文・文法などの総合的な学習データベースを構築するとともに、縦断的な日本語文法習得研究を行ったものである。被験者は2016年9月に上海師範大学に入学する日本語専門の学生27名で、宿題、作文、小テスト、期末試験、会話、卒業論文の要旨などのデータを収集し、ポートフォリオ型のデータベースを構築した。このデータを利用して、漢字・かな表記、格助詞、ボイス、指示詞、オノマトペなどの習得過程を分析し、習得難易度に配慮した日本語教材の開発に役立てるための研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は中国の上海師範大学外国語学院日語系で日本語を専門とする学生が大学に入学してから卒業するまでの日本語データ（宿題、作文、会話の音声）などを収集し、主に文法習得について分析したものである。これにより、日本語学習者の初級、中級、上級それぞれの段階における助詞、指示詞、複合動詞、オノマトペ、ヴォイスなどの困難点を明らかにし、日本語の文法教育における教授上の要点を指摘することができた。また、本研究によって収集したデータは日本語学習者の書き言葉や話し言葉を時系列的に収集したものであり、今後の日本語教育研究や日本語教育実践に活用できる貴重なデータベースとなっている。

研究成果の概要（英文）：This paper presents a longitudinal study carried out on Japanese grammar acquisition and was conducted to contribute to the development of Japanese language teaching materials with consideration of the degree of difficulty for learners. This study recorded the process of Japanese language learning of native Chinese speakers starting from their enrollment at university to their graduation, and constructed a comprehensive learning database of conversation, composition, and grammar. The participants were 27 Japanese-language students who enrolled at Shanghai Normal University in September 2016. The constructed database is a portfolio-style database, and consists of collected data on students' homework, essays, quizzes, final exams, conversations, and abstracts of graduation theses. The learning process of kanji and kana notation, case particles, voice, demonstratives, onomatopoeia, etc. were analyzed using the collected data.

研究分野：人文学

キーワード：第二言語習得理論 文法習得 ポートフォリオ 学習データベース 中国人日本語学習者 母語転移 対照研究 縦断的研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は中国語を母語とする日本語学習者が大学に入学してから卒業するまでの日本語学習過程を記録して、会話・作文・文法などの総合的なデータベースを構築するとともに、縦断的な日本語文法習得研究を行うものである。近年、日本語教育の分野では学習ポートフォリオの活用が提唱されている。平成24年1月31日に文化審議会国語分科会から出された「「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について」では、「日本語学習ポートフォリオは学習者の日本語学習の履歴と能力を把握し、日本語学習・学習動機の維持を継続的に支援するための具体物である(p.5)」として、その有効性が指摘されている。本研究はこの学習ポートフォリオを活用し、学習者の「成長の記録」や「学びの記録」を詳細に収集・整理して、中国語を母語とする日本語学習の習得研究に資するデータベースを構築するものである。

本プロジェクトの代表者は、これまでに「華東政法大学作文コーパス」や「湖南大学学習者中間言語コーパス」を作成してきた。本研究はその成果を背景として、日本語学習者の縦断的データを収集して学習者の文法習得を明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は中国語を母語とする日本語学習者の文法習得を明らかにするものである。これまでに「華東政法大学作文コーパス」や「湖南大学学習者中間言語コーパス」を作成して中国語話者の日本語文法習得を研究してきたが、さらにデータを増やして日本語の文法習得を明らかにすることを目的としたものである。

また、本研究では中国の大学で日本語を専攻する学生が、入学して日本語を学び始めてから卒業するまでの日本語の成長記録を収集してデータベース化することも目的としている。これにより、文法以外にも作文、会話、文字表記などの成長過程を分析することができ、今後の日本語教育研究や日本語教育実践に資する貴重なデータベースとして活用することが可能になっている。

3. 研究の方法

本研究では2016年9月に上海師範大学外国語学院日語系に入学した日本語専門の学生延べ27名を被験者として、学習者の宿題、作文、会話、試験、文法アンケートなどの日本語データを収集した。収集に当たっては、海外研究協力者として上海師範大学の張善実先生にデータ収集の補助をしてもらった。途中で退学や他学科へ転出した学生はその時点で調査を終了し、他学科から転入してきた学生はその時点から調査を開始した。データは個人別・課題別にファイル番号を付けてエクセルで管理し、エクセルの該当箇所をクリックすれば元画面がすぐに表れるようにした。このようにして個人または課題ごとにデータが比較できるようにした。

格助詞、指示詞、オノマトペ、ヴォイスなど特定の文法項目に関しては、個別にアンケート調査を行い、日本語母語話者(主に名古屋大学の学生)と比較した。

4. 研究成果

(1) 上海師範大学における日本語学習者の日本語データベース作成

被験者: 上海師範大学外国語学院日語系の学生延べ27名

母語: 中国語

調査時期: 2016年9月~2019年12月

収集場所: 上海師範大学(中国・上海市)

概要: 2016年9月に上海師範大学に入学し、2020年6月に卒業した学生延べ27名の入学から卒業までの日本語学習データ(宿題、作文、会話、試験、文法アンケートなど)を収集して、被験者毎にラベリングしてデータベース化したものである。途中で他学科に転出したり退学したりした学生はその時点で調査を終了し、途中で日本語学科に転入してきた学生はその時点から調査を開始した。本研究は文法習得を目的としたものであるが、会話研究や手書き文字の研究などにも資するデータであり、今後の日本語習得研究に幅広く利用できるものとなっている。

(2) 中国語話者の日本語動詞習得に関する研究

指示詞(こそあ)の選択

日本語の指示詞は「こそあ」の三項体系であるのに対し、中国語の指示詞は「这・那」の二項体系であることから、中国人日本語学習者は中称の「そ」の使い方が難しいとされ

ている。これに関して、本研究では話し手と聞き手が隣同士並んで会話をしている二者会話場面を16場面設定し、中国語話者と日本語話者の「こそあ」の選択の違いについて調査した。その結果、日本語話者は中国語話者に比べて心理的な遠近感を重視するのに対し、中国語話者は日本語話者に比べて物理的な遠近感を重視する傾向のあることを指摘した。また、日本語話者が対立型で捉える場面でも中国語話者は融合型で捉える場合があることを指摘した。さらに、従来は第一話者（話し手）の指示詞選択についてのみ論じられていたが、本研究では第二話者（聞き手）の指示詞選択についても見ることにより、第一話者と第二話者で指示詞選択にずれのあることも指摘した。

「Vスル前+格助詞」と「Vシタ後+格助詞」

日本語学習者の作文を見ると、「～前、～後、～時」の前接語の語形や「～前、～後、～時」に付く助詞の誤用が見られる。しかし、従来日本語の時節を表す「～前」_レ、「～後」_レ、「～時」_レについては、前件と後件の時間的關係を中心に論じられてきた。そこで本研究ではこの点について、BCCWJによって日本語の実態調査をするとともに、中国人日本語学習者の誤用コーパスを使って、学習者の誤用の傾向を調査した。その結果、学習者は前接語のテンス・アスペクトや後接する助詞において正用でよく使う形式を過剰使用して誤用を犯すことを明らかにした。

複合助詞「について」「に対して」「にとって」の選択

日本語の複合助詞「について」「に対して」「にとって」は論理的な文章を書く際に必要な表現であるが、中国語ではいずれも“対”で訳されるため、中国人日本語学習者にとっては使い分けの難しい表現である。これに関して、日本語話者、上級日本語学習者、中級日本語学習者のデータを比較した。その結果、中級日本語学習者は述語に見合う特定の複合助詞を選ぶのが難しいようで、日本語話者なら一つの複合助詞に集中する場合でも複数の複合助詞に選択が分かれる傾向が見られた。3つの表現のうち「にとって」は比較的日本語話者に近い使い方ができていたが、「に対して」と「にとって」は誤用が多く見られた。しかし、上級になると日本語話者の選択に近付き、特に「にとって」の使い方が身に付いていくことが分かった。

オノマトペの選択

日本語には「ビリビリ」_レ、「ジンジン」_レ、「チクチク」のように痛みを表すオノマトペがたくさんある。しかし、日本語学習者はこれらのオノマトペの意味の違いを必ずしもよく理解しているわけではない。本研究は日本語教育のためのオノマトペ研究の一環として、「キュン」_レ、「キュンキュン」_レ、「キューン」_レ、「キュツ」_レ、「キュッキュツ」_レの違いについて論じたものである。その結果、日本語話者は「キュン」といえば「胸」_レ、「心」_レ、「心臓」の痛みを連想する人が多く、「胸」と答えた人の多くが「寂しさ」_レ、「切なさ」_レ、「ときめき」_レ、「恋・失恋」などの精神的な胸の痛みを挙げていた。一方、まだ授業でオノマトペを習っていない段階の初級学習者は「キュン」という言葉を聞いて「頭」_レ、「心」_レ、「目」の痛みを連想しており、「胸」を連想した人はいなかった。しかし、上級学習者は日本人に近い選択をしており、習得段階が上がると意味の定着が進むことが確認された。

起点を表す「を」と「から」の選択

中国人日本語学習者は「私は 大学（*から を）卒業する」のように「を」を使うべき時に「から」を使ってしまうことがよくある。本研究は日本語のいわゆる起点を表す格助詞「を」と「から」の選択について、日本語母語話者と中国人日本語学習者の選択傾向の違いを分析したものである。分析に当たっては、「を」と「から」のうちどちらか一つを選ばせる「二者択一テスト」と、「を」または「から」を使った文について、正しいと思えば、間違っていると思えば×のどちらか一つを選ばせる「×テスト」の二つのアンケートを併用した。その結果、母語話者は「次のステージへの移動」を表す場合には「を」を選択し、「その場からの脱出」を表す場合には「から」を選択するのに対し、学習者は「その場からの脱出」を表す場合には「から」を選択しやすいものの、「次のステージへの移動」を表す場合には「を」を選択するのが難しいことを明らかにした。

日本語の「～て死にそうだ」「死ぬほど～」と中国語の“～得要死”の比較

日本語の補助形容詞「～て死にそうだ」_レ、副詞「死ぬほど～」_レ、中国語の補語“～得要死”はいずれも当該の事態の程度が極めて高いことを表す。しかし、先行研究ではその違いが明確に記述されていない。そこで本稿では「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」と「北京大学 CCL コーパス（CCL）」を利用して、これら3つの形式と共起する表現の特徴を見た。さらに類義語の「～てならない」_レ、「～てたまらない」_レ、「～てしかたがない」_レ、「たまらなく～」_レ、「おそろしく～」_レ、「信じられないほど～」_レ、“～得不得了”、“～得受不了”、“～得要命”とも比較して、これらの形式の共起語の違いを明らかにした。

文法研究において「許容度」と「選択率」の二つの指標を組み合わせると、「自然に言える」、「言えそうだけど言わない」、「言いにくいけど言う」、「全く言えない」といった詳細な文法記述ができる。本研究では「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択、指示詞「こ」「そ」「あ」の選択、自動詞、他動詞、受身の選択の3つの事例を取り上げ、文法研究において「許容度」と「選択率」の二つの指標を組み合わせるのが有効であることを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 2018
2. 論文標題 複合助詞「に対して」と「にとって」の選択に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日語教育与日本学研究 大学日語教育研究国際研究会論文集（2018）	6. 最初と最後の頁 111-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 3
2. 論文標題 日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択（1） 許容度と選択率の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 157-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 3
2. 論文標題 日本語の文法を見るための二つの指標 許容度と選択率	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東アジア日本学研究	6. 最初と最後の頁 5-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 3
2. 論文標題 起点 を表す格助詞「を」と「から」の選択について 三種類のアンケート調査の結果から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東アジア日本学研究	6. 最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 32
2. 論文標題 日本語のオノマトペ「キュン」、「キュンキュン」、「キューン」、「キュッ」、「キュッキュッ」の記述的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばの科学	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 2
2. 論文標題 日本語の複合助詞「について」「に対して」「にとって」の選択 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 0-0
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 2016
2. 論文標題 「Vスル前+格助詞」と「Vシタ後+格助詞」の非対称性について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日語教育と日本学研究 大学日語教育研究国際研究会論文集 (2016)	6. 最初と最後の頁 76-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村泰	4. 巻 9
2. 論文標題 話し手と聞き手の日本語指示詞選択の違い」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日語教育と日本学	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 4
2. 論文標題 日本語の「～て死にそうだ」、「死ぬほど～」と中国語の“～得要死”の対照研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東アジア日本学研究	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 34
2. 論文標題 如何描写日語複合動詞的語義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばの科学	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 4
2. 論文標題 日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択(2) 許容度と選択率から見た話し手の選択意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 167-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉村 泰	4. 巻 5
2. 論文標題 中国語話者における複合動詞「V1-疲れる」の母語干渉の可能性について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東アジア日本学研究	6. 最初と最後の頁 99-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計32件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 23件）

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の自動詞・他動詞・受け身の選択 許容度と選択率
3. 学会等名 2019年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 「火災で家（が焼けた / を焼いた / が・を焼かれた）。」の自他受身の選択
3. 学会等名 第十一届漢日対比語言学研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 許容度と選択率の組み合わせによる日本語文法研究
3. 学会等名 中国西安外国語大学・日本名古屋大学 交流協定締結三周年記念 国際日本学フォーラム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の文法を見るための二つの指標 許容度と選択率
3. 学会等名 第二回東アジア日本学研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 起点 を表す格助詞「を」と「から」の選択について 許容度と選択率
3. 学会等名 第二回東アジア日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 「試験の後、長い休暇があります。皆はすべて家に帰ります。」錯在口那里？
3. 学会等名 2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 複合助詞「について」「に対して」「にとって」の選択
3. 学会等名 2018年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の現場指示の選択意識について
3. 学会等名 第16回日本語教育研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の現場指示の選択意識について 視覚、聴覚、嗅覚
3. 学会等名 第十屆漢日對比語言學研討會（國際學會）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 中国語話者における日本語の現場指示の選択
3. 学会等名 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2018年度 第22回 国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の自他受身と指示詞の選択
3. 学会等名 中国西安外国語大学・日本名古屋大学 交流協定締結三周年記念 国際日本学フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の現場指示の選択 許容度と選択率
3. 学会等名 日本語 / 日本語教育研究会 第10回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の複合助辞「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の前接語について
3. 学会等名 アジア・アフリカ研究の視野における日本学シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 「強風でドア（が開いた/を開けた/が・を開けられた）。」の自他受身の選択
3. 学会等名 2019年「日本語文化研究」学術研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 「ダイエットで去年より体重（が減った/を減らした/が・を減らされた）」の自他受身の選択
3. 学会等名 第5回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 複合助詞「について」「に対して」「にとって」の誤用分析
3. 学会等名 2017年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の指示詞コソアの誤用
3. 学会等名 2017年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」と韓国語の「i」「geu」「jeo」の対照研究
3. 学会等名 韓国日本語教育学会・第60回国際学術発表大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉村 泰
2. 発表標題 日本語の自他受身の選択と指示詞の選択
3. 学会等名 TGU日本語研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 「～前」、「～後」、「～時」の誤用
3. 学会等名 2016年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 二者会話場面における日本語の指示詞コソアの選択
3. 学会等名 第七回中日韓日本語文化研究国際フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 二者会話場面における「この」「その」「あの」の選択
3. 学会等名 日本語 / 日本語教育研究会 第 8 回研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 二者会話場面における日本語の指示詞コソアの選択 南国商学院でのアンケート結果
3. 学会等名 21世紀新視野下の日語教学与研究国際學術研討会（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 二者会話場面における日本語と韓国語の指示詞の選択
3. 学会等名 第 4 回 日韓學術交流会 言語文化を巡って
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 日本語学習者の現場指示コソアの選択
3. 学会等名 2017年「日本語文化研究」学術研究会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 「コロナで家を出られない」と「コロナで家から出られない」について
3. 学会等名 第九回『アフターコロナ時代の日本語教育研究国際フォーラム』（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 日本語の複合動詞「V1-疲れる」のV1の特徴について
3. 学会等名 大韓日語日文学会 第64回秋季国際學術發表大會（2020年11月14日、韓国・釜山国立大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 以漢語為母語的日語學習者在及物動詞、不及物動詞以及被動表述三者之間的選擇問題
3. 学会等名 第一屆名古屋大學・屏東大學・文學交流暨論文發表會（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 日中韓国語話者における日本語の自他受身の選択について
3. 学会等名 2020年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 日本語の主体の状態変化を表す複合動詞のV1 + V2結合について
3. 学会等名 2021年「日本言語文化研究」学術研究会（上海外国語大学・名古屋大学・東華大学）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 "我每天騎自行車去學校"の日本語訳について
3. 学会等名 第6回上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉村泰
2. 発表標題 日本語の複合動詞「V1-切る」について
3. 学会等名 第2回 上海財経大学・名古屋大学共同研究会 言語と外国語教育（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	上海師範大学			